

遠

樹

遠
、
樹

馬
場
正
郎

(長風叢書 第五十一篇)

昭和五十年十月一日

歌集 遠い樹

著者 馬場正郎

大宮市丸ヶ崎町一四ノ一番地
電話 〇四八六(八五)六二七八

発行者 鈴木十糸

発行所 古径社

浦和市元町二丁目二六番二三号

振替 東京 七二八五二

電話 浦和(86)二三〇三

制作 新曜社

定価 一七〇〇円

序

鈴木
幸輔

この作者は国鉄大宮工場に勤めている。この『遠い樹』の目次を見ると、溶接、闘争、保護面、デモ、貨車、盛金、老工、合理化、鋼材、少年工、廃車、輪バネ、鋸、といった類いで、職場の歌が多い。その職場詠は、つぎのような歌である。

静まりし昼の作業場に誰か吹くハモニカの曲は寂しき曲なり
台車より外されし車輪がのろのろと転がり行きて二つ並べり
朝毎にこの路地を通う少女あり小児麻痺にして今朝は会わざり
新聞紙を巻きしハンマーの柄が少し出でておりたり鞆の口より
退職後の仕事語り合う老工の話ひそまれば聞き耳をたつ
火^{ほど}炉の火の落されしあとよりどなく人ら来たりて夕べとなりぬ
人轢きて来たる車輪が薄ぐらき床に鎮まるさまに光れり
野にひとつ骸となりし機関車が冬の日あびて影を落とせり

また家にあつては次のような歌を作る。

帰り来て脱ぎたる靴を揃えたり雑然と子らの靴散らばれば

妻よりも早く帰れば卓にあるメモ見てわれは掃除を始む

強いられてする勉強もいつの日か孤独となりて子は励むべし

戦後の長い間、原爆の歌を見た。デモの歌を見た。それは怒りの歌であり、戦う歌であった。それが今日に続いている。そこには組織があり、群衆がいた。その中に、ひっそりと働いている者が一人いた。生きているおのれを見凝め、流れゆく時を眺め、慎しく、寡黙に棲む一人がいた。それがこの作者である。勿論、この作者も組織の中の一人である。しかし、この作者は組織を楯に歌うことをしない。歌を歌とし、歌を政治に従属させようとはしない。歌を個人のもの、孤独のもの、一人の魂のものとして、

眩き、みずからに話しかけるものとしている。心の底の奥深く、寂しく、魂の息づくような一首一首とするのである。それは、くらやみの中に、螢が光るような歌であり、みずからが、みずからに歌って聞かせる子守唄のような歌である。わたくし達が長い間、忘れていた歌がここにある。一人しずかに生きてゆくこの作者に、わたくしはいよいよ親しむ。

昭和五十年五月四日

I 序

目次

鈴木幸輔

溶 妹 闘 厨 襦 保 雨 デ
接 争 褌 護 の モ

36 34 31 27 24 21 18 15

II

錠 梅 少 春
 剤 雨 年 の
 工 音

冬 鋼 賀 合 老 妻 盛 貨
 日 材 状 理 工 子 金 車

91 88 82 79

72 66 64 58 54 50 45 41

III

神	路	輪	石	鷺	黒	ハ	歳	廃	日	限	夜
経	地	バ	の		ペ	モ	晩	車	々	界	の
		ネ	庭		ン	ニ					海
					キ	カ					

128	125	122	118	116	114	111	107	104	101	96	94
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----

派	メ	暗	歳	風	足	山	無	氷	鋌	立	朝	靴
閥	ユ	渠	月	邪	場	の	花	柱		葵	の	紐
	河					湯	果				花	
											屋	

169 167 164 160 157 153 151 148 146 142 140 137 133

IV

薔	若	遠	路	日	冬	山	街	風	足	陸		アル
薇	葉	い	上	常	の	の		鈴	の	橋		バイト
樹	樹				月	湖			爪			

205	203	199	196	194	191	189	185	183	180	177		172
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	--	-----

V

あ と が ぎ	火 花	阿 蘇	雑 踏	家 一 つ	冬 の 星	紅 葉	秋 の 土	葦 群	父 の 死
------------------	--------	--------	--------	-------------	-------------	--------	-------------	--------	-------------

243	240	235	233	228	225	223	220	218	209
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

遠
い
樹

I

